



日本絵類考

四

10
75
11



日本佐類考卷四

目錄

重話

佐手切

劇場者板佐

俳優似顔佐

志々子本

讀本佐

佐手紙

書筒筒重

劇場番附佐

佐者板

佐草紙

鳥羽佐



繪
話

の

八年玉



匣
話

畫物三不仕以

江戸本町三丁目

式亭三馬



去々々々
一名五々

模文匣話

畫物


不仕以

曇々今年出しつゝ小冊あり 明和の安永 寿末

小畑仲と五徳の図を著して為形活と号すも

二回あり ごとの活ハ下 其形の故を温めて新

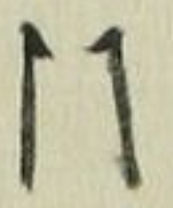
と云ふ 重作の再興ハたゞなまき書と書と有と云ふ例

の 該作者洒落高 或亭之馬也 


佐々木一の仕振

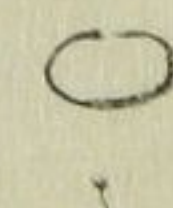
標所々々寫々を抄て是々一とかくなりこち

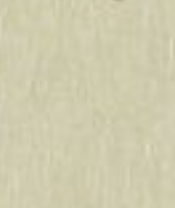
らの方々のも持て是々一トかくなり行達

あんとくふなり  ト 前後ニツト 又くぬ

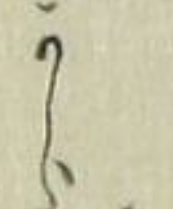

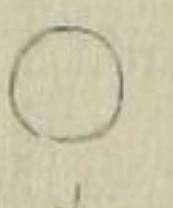
又一人り出て是々一トかくまん中へ入


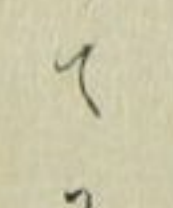

111 ト三ツみなるなり  ト かくて 双方なく あいさ

つたといト  ト かくて 其〇とかく 元のおと

くふなり  ト かくて 落しなり



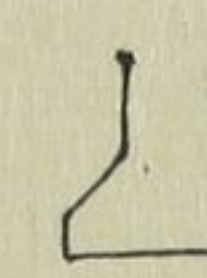
標  ト かくて 其〇とかく  ト かくて 其〇とかく  ト かくて 其〇とかく

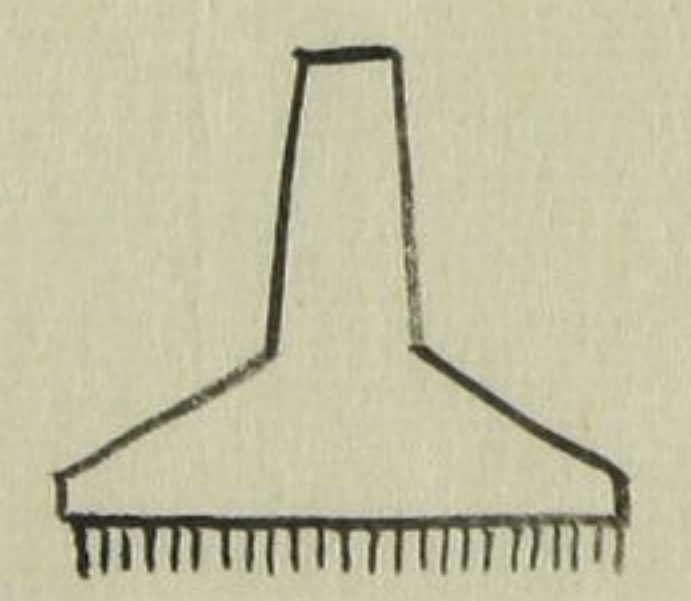
く  ト かくて 其〇とかく  ト かくて 其〇とかく  ト かくて 其〇とかく

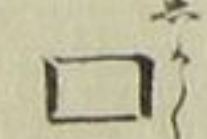
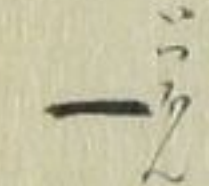
つと花の出る「おとよあきれ」て
 ○ぬ



○
 オヤねひさーぬそたが今ハとちふたもまひ
 ださしうけハイそとけふ家前をしきうい
 と新まじうるとしはあやがまじハてまへの

櫛所を

 ううまがうてきまると種々
 一面よ
 生て折る其のとむてこごそまうけうと
 お出あさ
 い何との刷毛序ふ

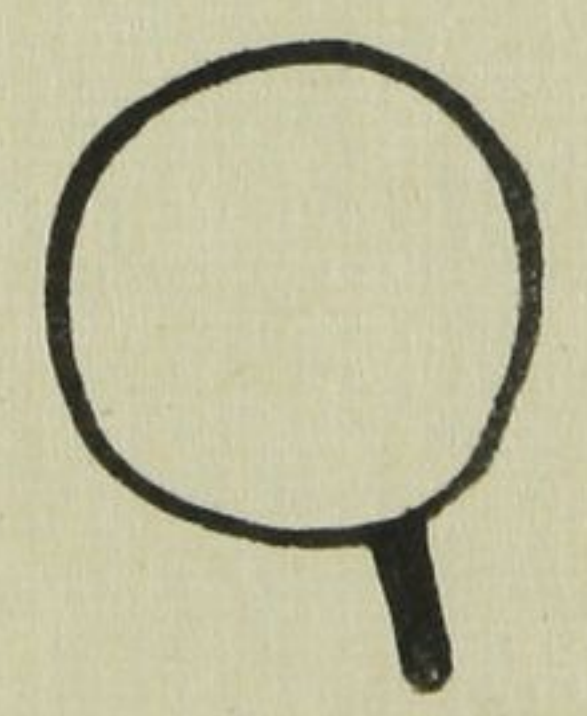


○
 丸の内はは居安の言ふ二本つ、様本うそせり
 あとと遠方はは下やきなまハ
 小言うあ
 下横よ一

 たのうあるがまじうてこと

とよ〜 料人くとよい 下よ 真価と〜〜〜
こわど 飾の 飾画



〜〜〜 所の 木か〜〜ん 奇産好々 痛てあ
さゆい 腕より 内中と ○〜
そよまの つて あつき 出
たそい いたを 固麻の
〜と 後の やうと



○い やうか 月取ふ 登と

ぬ〜〜〜 きささちとよ 不どか

二 巾 様ぶ 去〜 蓋の 残々あ

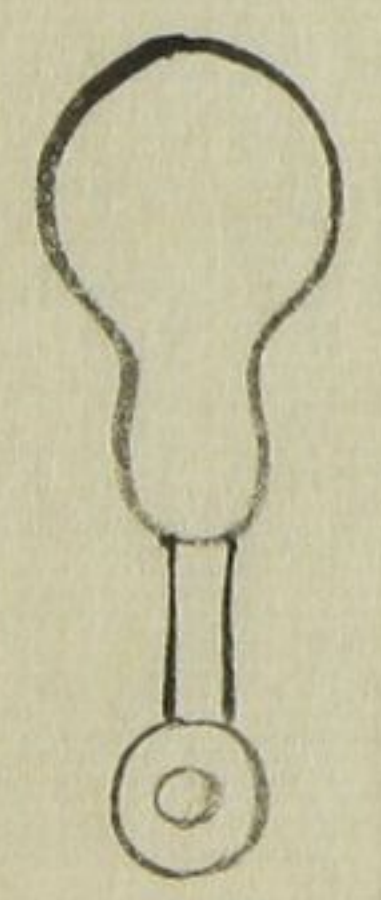


真味 久去 ○ 瓢箪の 馬去〜 の 下よ 鬼上 官清

正の ◎ 紋所を する 故の

軍兵 ヲリヤ とも こと

ふく け〜と



親の顔のがさぬ Xトお合の助を力らまよ Xト

~~~~~

Xく~~~~ト大摺ッ切マ

あつちへ~~~~ 奈ッ二人リ

従と~~~~ 御~~~~ちぶつと

~~~~~ 往還ッ

「イ、ヤ竹馬の中ダ

○

~~~~~ の中へ好らこんた思ハ

隣ヤ~~~~の幕の

内ゆら奴が

尻と~~~~つて身

○

「習と~~~~さうお書注と~~~~おがゆッが肝要

ちやまつ一文まの口傳と~~~~ハテ

子「イヤ~~~~を~~~~ハ筆志ッ~~~~い~~~~つとカとい

~~~~~カと

~~~~~ア、ち~~~~

一とキテ万と去~~~~子



依重を以て彼の紙は法語のりよとて工支法  
の口好のくく諸國をわあまてあまて墨  
判とてめめつ支那の紙は墨とて墨  
小遣りは故出紙進くふ及つて紙のりよ  
高年とて引墨料相定り即ちよて仕は且紙向小  
とては他を一直し紙十点と上小冊と紙  
一東春書林とて奈兒紙の同点と紙は出紙即  
して紙のりよ

古例  
若中はたわると春のそととて  
いつとわつて紙のりよ

### 法字紙

法字紙の画とてと紙の文字は代用とてむ  
その紙の昔飾紙高とて法字紙と紙は紙と  
とふと文字の間小画と加つてのりよ  
かま河島紙高の法字紙の紙のりよ  
と交つてとて紙の法字書とてと紙  
とてとて即ちめめめと紙と幅と  
小判及重若三ツ根とてと紙と十円と  
とてと紙のりよと紙と紙と紙と紙と  
十通舎一九書と紙の文字と紙と諸の物象と紙

きて文言と初めたる支槍りの音曆の如し  
こ是一封の款なりと去りて後手紙  
の一種として可なり

### 書簡筒匣

書簡筒の匣ハ武徳年表寛政年間の際ハ書簡筒  
と款を指してありと寛政の末ハ手紙と  
ありて其ハ様遊若實ハ其ハ後侍ハ不脱封筒匣式  
等委し出てた且も世人好むものとなりて  
しを頃ハ信同封筒ハ封筒を用ひて  
なりとことと書簡袋とハ其ハ款を金指せし  
て撰振さむありて鄙俗なりハ所部ハ信所  
しとハ出来ぬあり

按、款を金指の書簡袋盛之行りハ文化文



半切紙一丈と信半切紙一丈と其のちり  
後ハ半切の信として別紙更きて奉書又ハ紙入  
の半切紙指し一紙小用ぬ。こゝろ、カキをたゞと  
半切紙半切紙を用ぬ。こゝろ、何の頃とて紙を  
しり、洋紙とされども、紙遊笑覧小昔と相違小昔  
ハ用筆の子紙石形を繕きて使きて、口上小昔  
と女中の方と大う、下女使して用更口上とて  
さむ、まゆ、紙筆を年の十か一よ、い、信之紙  
下直せり、い、を年の口上とて、まゆ、こゝろ、よとて  
信之紙、一紙と多く、い、か、半切紙と、い、の

ハかつて、ちり、六十年と、ちり、半切紙を用ぬ、  
ちり、なり、ちり、い、ちり、享保十七年と、六  
十年、ちり、延宝のちり、ちり、ちり、ちり、半切紙、延  
宝のちり、ちり、ちり、ちり、其のちり、ちり、行ハ  
ちり、ちり、ちり、ちり、



歌管枝の佐看板ハ鳥居流ふらきと評しあ  
へりこも本自梅つらと又迫世の河鍋噴高  
市村坐りて能の土物と演と一軒其佐看板と重  
きたる重法鳥居小橋とと中ふこらと加へ  
佐看板佐小無達ととの如く頗巧妙なりき  
時代評して丹青の奇也なりとり

### 劇場看附佐

劇場看附の佐ハ看板と曰く鳥居夜也とこら  
と重き他家の人ハ看重とさす天明年終川  
昔春相坐の看附と重き寛政十年結后坐の看附  
と重き一こらあま一と重風何とと鳥居凡小橋  
てて歌川家の筆とこらと重北尾重政亦相坐  
の看附と重き一こらあま一と重亦鳥居の風  
小橋、實ハ看附ハ鳥居凡小橋の如く行つと  
れそのなりとと鳥居世々社中清信清信清満清  
長の四人最妙と評す



役者真魚の文宝曆の娘は以馬工島山石燕なり  
者白木の粗末なり長二尺四五寸幅八九寸の額  
小女形の中村森代らより額を似形と更けて決  
至親吉重の常吉の日記なり柱へつけたる諸  
人をつゝしきくして沙汰おかしひゆへは是  
江戸より似形佐の娘なり其の形よりして  
一枚佐して役者一人と額入紙とを知らせて  
其のそととをきく三四遍し一層へ市川海老  
花洲川菊と画しし額と印するのそとを龍ハ  
そとと似も一枚四束の子をきく云々

寸錦雜傳小臺春幸の嵐吉八の似魚佐の俳優志  
圓はくしとくや  
骨董某小芝居の魚の坊主小と縁と画けり  
其とくしとくや  
高寺ハ丹保志なり  
ら小彩巻したる善川師直古山師重等とくしと  
りて云々  
神史臆記年代記小柳文潤役者似魚佐の元組  
川春幸佐して似魚佐と云々  
古臣備考ニおとしめて川飯小安永年中一筆  
文潤とつとくしとくは役者の似形とつとくしとく



出〜〜たる右巻の筆跡〜〜其顔色形〜〜と  
つ〜〜たる〜〜又任丸田小文洞善童〜〜小役者  
似鳥佐四きつれと春葉の〜〜大〜〜物〜〜ら  
あ〜〜世間〜〜ま〜〜司〜〜の〜〜文洞似鳥  
佐とや〜〜身幸は浮世佐と切きた〜〜  
梅小車本名富麻二冊の春葉文洞を〜〜役者  
の似鳥と画きたる新画画なり 然し二人の春句  
あり 風小車とわ〜〜時〜〜の柳〜〜此春葉佐のこ  
とも素魚とほと不二の春文洞の画と〜〜  
二人の似鳥画の優劣と〜〜

梅小車は浮世佐師方極俳優の似鳥とあり〜  
り 鈴木春信長多川歌麿著錦此高は教人のい  
の〜〜一見識あり〜〜画〜〜は浮世画類考  
本信考は素小春信一生歌舞妓役者は画とわ  
〜〜て〜〜これ大和画師なり 何ぞ河東の  
形を画〜〜描〜〜や〜〜其の志〜〜切〜〜の〜  
云〜〜長多川歌麿の素小生喜 役者画と〜  
〜〜て〜〜言〜〜歌場懸昌〜〜老若男  
女幼少の役者あり〜〜と画〜〜名と〜  
ハ拙き筆なり〜〜と俳優の餘史とわ〜〜んや浮

世任一派とて世小名と興と一と此方のこ  
しきい自ら言つても現に俳優と云うても  
しかり又も俳優似息任と云きたるハ文詞香  
素は徒やして新川早圃より其の画はあ  
粧行と松山拾と似形魚吉のこゝろかりき文  
化十四年早圃と役者似白早誓吉と題と一書  
と著り一似息任と學つての便小供とて其の  
書は凡例云くを頂画のたあきと小行り此小  
其業よりあぬ人まゝも紙つとていかに  
ぬと且ら中小流世任つての跡ふくはとて

やまとのめり今在形のみしき任いしとハ  
りりも新香美齋より考り芝居役者の似息と  
わけそのひくとの流りてたつとてへの  
哉まゝも松本寺町の鼻言と似と岩井正四  
らのくらげと出たるとも其の任は画してれ  
めづりの画師の目ともわらうとての女なる  
りりよつて今一陽高ふの役者似白早誓吉と著  
り一業の骨格とせははらとてのい心うとてた  
ふかまゝのいしとて是ふたるといあわとの  
こゝ出来やとて様の工更とてわらうとての

かゝるの神皇行能任馬類ありし所を板垣の任と  
素人の画々小けの母と協成として可くも其の  
字をそして似鳥の出兼中そまこととて  
教つるの如し○似鳥の如くつりし肩月鼻はそ  
こいつ達ひあまて誰かたれ渠のうまといふ  
このままいよけの書と生じて其の氣味と  
まよへりつる○支舞の画きや素人の如き  
たよハも芝の長短として容姿のつる合趣  
そよこつてあまのなまといふ今あつてさや小裸  
はわつとありつるこよよ長靴と着てて固く

よとのいとよりのあやまりなりしあまらん、  
あまの顔のこよよまよつる美別ありて  
こよよ其の役と容態とそよまてまよま  
よつる○容態つるまよよまよまよひて教  
品ありそ年まよ新製の髪ありてあまて其の役  
よよあまのまよまよのまよちあまこよよ  
いよよまよまよ其のた極と固くありよよか  
つるも肝要のものなまよ能くよあまのせり  
也  
又書中少授者似鳥要法と額し似鳥と要し其の

上小もんでたきくと重くよまつてかきまきた  
小重く〜次よけの國の〜口二眼とと  
の頭よ重く〜左あ〜おもとて面がの松  
好たのつ〜よ〜備つ〜た〜重くよま  
〜も〜出まや〜こ〜役者似息い〜  
故ふた〜の氣はあ〜誰〜た〜  
〜と〜一月よあ〜そのな〜其の癖と重く  
あ〜肝心や〜はの似良重の〜よ重法と  
我〜い〜无物〜背あ〜西あ〜人の警法  
はま〜と顔〜い〜眉間の間と顔〜よ〜五難組

一尺の面憶兆く〜ちと〜方寸のあ〜法  
憶兆向を〜あ〜とい面顔又子足相背  
た〜ものあ〜其の〜よ〜い首肉親  
成〜い〜あ〜い〜小劇場ねよ  
い面小形をと〜虚言と〜つ〜○両眼  
の瞳子のうち背よ〜と賑〜い〜役者の眼つ  
〜い末の目小窓〜こ〜あ〜て〜斜〜  
て丑の仰〜視〜ハ眩洋〜其の用〜と〜ら  
賤子の〜ま〜よ〜と〜海〜○眉ハ眼よ  
〜して〜あ〜い〜い〜い〜の眉愁〜



絵看板

絵看板ハ劇場の看板ト云フ。専ら観客と誘フハ  
主トシテ一種の画法トシテ之ト云フ。自一専門  
の業トシテ嘉永安政年間西回年ト云フ。者ハ其  
善ク看板と云フ。香亭雅談ト云フ。時有俗画史云平  
者以往西回橋也。自稱曰西回年。尚時橋之西東觀  
場甚多。各掲重牌於場外。以誘看者。其弄蛇、闘犬、跳  
竿、策組、猿騎、菖鉤、花頭、短人、珍禽奇獸之類。大抵平  
之所画也。重人其生甚貧。請為其助手。始詰年之正  
仲。方丈紙。白描。已成時。布彩。命生先備。礮盆。投顏料。

於其中極力研鍊已乃約袂結袴靴大小刷子從年  
塗抹生輝礪盆從其後周旋未往至晚茫々然而歸  
曰不圖年暮如許病我也蓋年之匪甜獨不足道也  
魚國式異様丹華鮮明絃絃俗眼以此一生悠然丹  
青於衣食云

按小佐看板ハトトマハ親場ノ弟ト揚けた  
そのちろろ今ハ往々高家ノ招牌ト佐看板ト用  
ゐるこゝろちろろた

其々本

用信長海防理本刊行の初の條ハうゝに撰  
る冊子と種々も昔あると本と稱々一物の衆悪  
なりとて丹録とと業まのせし彩巻ととちり  
して最古雅なり云々  
按小本ハハ位のとわす彩巻ととつふ  
り後一巻と本ハ即ちとた本なりとと極  
てて粗末なり彩巻なりと惟ハ思ハ致しとと  
けり如く宣永貞享年同行りし譯より本小

信州紙

信草紙一ニ草双紙トリノ信草紙ノ稱ハ浮氏物  
語トモ又トク由來甚古トウの古の物語の信草  
およの社寺縁起の信草等ハこと蓋シ信草紙の  
紙名ナリトシ古くヨリ草の信草と指シテ草草  
子トリノ花鳥餘情ノ書物トモ草紙トリトクあ  
テ又草双紙ハ森多村信節の説クハ昔の草紙物  
語ナリトク居ノホホトウハトクヤ草紙双紙声  
お郎トク九ハリノカクモ曲草馬琴の説クハ草  
双紙ハ具草紙ナリモ落様の通紙トクモ思量ノホ







なす〜宝暦十年庚辰の春油所尾小山寺九兵衛  
酒家の双紙大行歌他の作と好むこと  
て并〜のさ〜預号にか紅魚〜  
と鱈形酒の〜下風と守〜が安永五年丙申  
て草子の紙より表紙の預号と〜と小風とわ  
て印摺と〜  
〜と享保頃〜上方の紙双紙ハ行儀常の表紙  
よ〜三冊〜の毎春春行〜て子供の教〜  
ハ祐行な〜相書ハ其續自免〜  
お〜ひて州紙享和二年孟春板本四山〜  
門西陽東佐金著上界

草双紙〜小冊とむ〜  
歌の重〜  
嫁入〜  
入の洒落〜  
〜四方のあり〜  
本〜  
〜志川春町森と二〜  
さ〜思きの教〜  
多行脚日記安永七郎中福帳森と二  
〜年〜歳〜物〜

岡崎所と名付、遊里の時表伺うて行田舎の土  
産物なりとせし通辭なりて一向を兼了  
とて小傳々洒落本と名つけし。袋入小冊を樓  
は席客の對坐酒宴の遊藝者の應對國中の睦交  
小つらまて其席とて、如く歌傳なりと  
作者よりは道の初傳りり。山東系傳り妙  
傳りて、その如く、こまかきし、男女の衣  
裳品形盤の伝ひ、その方去り、斯も習  
て行り、その如く、道哉、その如く、つら  
と、別世界のこま、その如く、又、未のせし

くの如く、たれん

一、信一、言ふ曰く、往幸紙ハ三十年前、たれん、古は  
武者切名の次身、まゝ、何と、歌傳なりとて、  
その如く、信一、つら、詞と書、その如く、  
き、その如く、あ、その如く、安永の頃、高慢、行脚、日記、  
い、その如く、歌傳、出て、歌傳、その如く、世、その如く、  
集、その如く、注、その如く、其、その如く、世、その如く、  
の、その如く、その如く、其、その如く、世、その如く、  
、その如く、其、その如く、世、その如く、  
草紙、その如く、其、その如く、世、その如く、

述すべし其書素の校と奪りぬ其の後其校の校め  
ふかひいて作者と可讀とらるる事あり是れ  
まゝ一書して心學のむもむきとて其事い高村  
の酒落し編で教訓と表して臨み其教者の意  
と違ふ世編教百部目と何りて出さふ及て  
さきの法蕩の編とて其まゝ且とも作らば其後  
まゝ其能く其知雅の祝好なり其大人も亦  
こゝと其れこゝと其知雅の導とありまゝ其ま  
くかむ

用雅若寛文延宝年間六方洞の経草紙行り

こゝに成りし條正本在十古法門の重草紙  
の重と節とて六且とも其まゝの草紙教種あり  
まゝこゝに其の奥書より又こゝに其まゝとて高村  
其流りありいやうに何うとあり六方と標題  
とつけし草紙のまゝ人のまゝとて其まゝと  
又正本在十古法門の又世根なり其経草紙とて  
の圖と載とて書いし其高也男據り其撰延宝  
四年卯申ふりし其曆竹ふりし其まゝ四方は其まゝ  
其山曆より其草紙の類といふことなり竹ふりし  
にて其まゝありし其昔に其まゝなり其海防の者



粘入し指て讀本の如く仕立し上本といひ  
て文化七八年の頃より合巻といひ一巻して袋表  
紙といひけたる物なり文政のころより出でハ愈  
々多し〜華美なりとの事〜亦付後種々な  
盛ふりし〜この事〜ふりし〜事なれと聞ふ  
〜と重しハ固身盛なり

浮世伝形考別本より草双紙も文化の頃より  
の表紙となりて合巻といひ〜のふなりぬ正徳  
享保の頃赤巾にて紙数五枚位より分た〜い唐  
紙の表紙なり〜と希く見〜紙ふなり〜と

と赤本といひ〜と藍黄を其表紙〜と  
其本〜は〜は後黄表紙となり〜と其本とい  
ふなり〜天保寛政のころ〜人〜本〜と  
さ〜し〜の序紙表紙とつけ半紙摺の袋  
入〜〜草双紙あり〜と今の位双紙の  
合巻と製本と〜の事〜  
今其系細見の事  
製本の体のこと  
按ふ赤本といひハ金平本といひ黄巻り紙とい  
〜  
中層年忌清長法ハ金平本の作者なりと  
中板  
〜と其後西遊記と初〜半紙摺造のもの法  
〜と其舌切雀籠便ち〜の〜一紙葉〜と〜

と能く書装の目録とカギと書装の目録と  
其後通魂紙五枚了 借て價と云ふ小書と書  
紙の表紙の頃の三四編の位と書りて表紙  
小張と書りて京和年間小價十文つゝ小書と書りて  
けの頃と書りて昔出まゝ八月出後紙と書りて草双紙  
と書りて京和の階層本れと書りて年毎小書と書  
らと書りて量目と書りて小書と書りて款付の物語と  
なると書りて編と書りて年毎年と編と云々  
こゝと云りて深表紙の上小飾魚と書りて板と書りて  
張りまゝは頃と書りて本紙板と書りてあゝひハスレコ

こゝと云りて紙と書りて製と書りて表紙一面の紙と書りて  
又是と飾紙の枳竹の表紙と書りて招元紙双紙  
紙の工まゝと書りて佐表紙と書りて書りていつと  
草双紙の名ありと書りて書りて書りて書りて書りて  
あそと書りて世の道中双六と書りて書りて書りて書りて  
つゝ千代紙白粉遠慮の装と書りて佐指と書りて書りて  
美藤と書りて書りて書りて書りて書りて書りて書りて  
物之本作者形数本作者却に江戸の名物本  
と書りて書りて書りて書りて書りて書りて書りて書りて  
貞享元禄の間京保と書りて書りて書りて書りて書りて書りて



とて少儀形ありし昆沙門形甲形なり行成標  
紙としてして酒器等にお儀形にお儀なりとの紙  
券と小判ふきとて或は押り。標を是れ和泉若  
更々金平洋のり。の正本と極よき。のりなりき  
かくて京保ころとて。後ハ丹標紙とくけた  
るその年と出。うい。世俗とて。赤布とて。ひひ  
るわく。て寛延宝曆とて。漸く。の丹の價をくふ  
り。り。の代。ふ。黄表紙とて。一巻と紙  
五張と定め金二巻と十二文ふひり。が。三冊物と  
十八文ふひり。きた。て。う。中。小。右。板。の。冊。ふ。ハ

是標紙を以て。一巻の價五文。つ。り。て。世。小  
ことと具至紙と。この冊子の書は。ふ。あ。り。ま  
て。薄。様。の。返。魂。紙。と。悪。具。の。ふ。り。ひ。あ。り。た。り。小。具  
系紙の石と負。この頃。と。て。重  
の外題。か。して。赤。き。分。高。手。紙。と。載。り。墨。摺。一。遍。ふ  
る。り。其。の。活。紙。新。し。ま。と。古。と。て。古。切。在。儀。蟹。宮。哉  
あ。り。の。童。法。と。始。と。て。或。ハ。右。平。紙。の。抄。記。經。本  
の。抄。録。なり。と。者。毎。小。種。と。出。て。て。價。も。黄。標。紙。新  
板。一。巻。八。文。二。冊。物。十。六。文。三。冊。物。廿。四。文。古。板。ハ  
七。文。二。冊。物。十。四。文。三。冊。物。廿。一。文。や。り。き。馬。と。ふ

書賣ハ真草紙の具のまじりて茶あるといひしを黄  
表紙せしと為し唱へしと理ふらばいさし標を  
且とも宝曆以後筆の具乳もあはせ世伝五冊子  
と心得しとありハ草の爲しとて義とてつて  
茶と紙ハ五表紙と五つひしとて四つて明和の  
末とて草双紙の作酒巻と古とていふ大人若  
子も是とてあしつとていふとて世はけと  
且て魚外類と四通のを括やとてその中み珠  
ふあつと他の彩紙ハ大半紙と二つ切ふ括とて  
薄掃巻の一重表紙とつけしをその袋入とて

て三冊と一冊ハ合巻とて價ハあつて五十五  
文六十四文とも賣りしこの天啓申切つて寛政  
のころなりの初しを草とての價もよめて黄表紙ハ一  
巻十文(二冊物廿文三冊二十文)五表紙ハ一巻八  
文(二冊物十六文三冊物廿四文)ふなりぬかくて  
文化の年とてこは筆のふらうしきとのと半紙ハ  
括て各地の厚標紙とてけり袋入とてと上  
紙括と唱へて茶標の書賣ハ茶とて信所の寶本  
石ハ茶とせらうして二三百部ハ春毎ハ賣上  
たれとも價のまじりハ草双紙の一紙數千



る 昭和安永の頃ハ二冊物もつけかへて中よ  
一冊物ハたゞ〜地口〜目つけ位なり  
たゞ目付位ハ宝曆明和の同派なり〜耳〜古板  
新板〜小摺のき〜ハ〜何とも一巻の帛五  
張なり文化ハも〜四冊もの二冊もの出〜  
の是〜二冊十張の物ハ坊ハ見たりぬ  
ゆ〜傾城水解傳出〜十数篇の傍りとの  
流ハ〜は〜西本仕立の紙数篇出〜た〜い  
〜一編〜小紙の故向習〜た〜ハ傍り  
〜の〜あ〜り 諸切物のい〜長〜ハ 在〜り〜

傾城水解傳ハ金比羅利生鏡〜を 贈〜り〜なり  
享保ニ希ハ小判の伝双紙ハ作者の存〜と著〜  
〜た〜を〜き〜り〜き 勿論作〜り〜ん〜き 而〜の物  
〜の〜あ〜ぬハ〜り〜 享保以後赤本の作者漸  
〜の〜多〜く〜なり〜云々  
釋史臆伝年表記ハ名作本略記と掲げて金々  
先生業花の長高慢高行脚日記もか〜り〜ぬ〜  
まん男三幅封お〜り〜と吾我打巾の款〜り〜や腹  
つ〜り〜楠の本巻作記あり〜道〜文章二道〜り  
こんふひりきり伝〜り〜  
以上志川三林より

このさしあそりね入七人化粧桃を白浪白と  
しるしあつるアとて後うそ八百万ぜんち  
いさゝらういさゝ文藝二万石通一以上在り  
いたるの如く女郎の儀と玉子の角文などかの下  
長物倍大懸の千六本たりんも仁まきん十四  
けいといはるゝのうら 以上まきんといはるゝ  
万象まきんあゝの根ふ金のちりき 唐東梅とせし  
以上の釋史を括して名化二十三款といひま  
むりゝゝと書本と魚うきゝゝとをいひて奥村政  
信餘本春信文細部能多勝川春幸春好春潮春林

春山春物春夜春川春春華りり又まきま本と重  
きうゝ重上ハ鳥石園清長勝川九徳高春英森多  
川新慶北高辰政北尾政徳慈高政美あゝ  
春本春表小安永四年意川春町重信金と先生栄  
花若大とけゝゝのの本形とととと書本の紙向  
一書ととと  
日五年春町重信高慢高新所日記行ゝゝ 日六  
年昌我重信三宝利生初竹ちゝ行ゝゝこまの機  
子親也書は千五百年期の開扉ふゝんふといわ  
ゝの事南村流りの茶賣菓あゝと學出せのこゝと





まを作し出さるるまを人と新一方を就つて刑  
の大方を著し其に投牌賭博の刑の小なりとのふ  
る後世の釋史刑の大方を撰し其に刑の  
小なりを撰し其に支理小たりと撰し其に  
年四方山人の撰し二年の内二と叙するの  
と楚滿人撰し其に四年の撰し其に文化の撰  
の釋史の滿夫と撰し其に丁五帳と年代記小表  
之二の撰し其に撰し其に又万八傳と表之二  
と撰し其に撰し其に撰し其に撰し其に撰  
雪と房信と別人と撰し其に撰し其に撰し其に撰

まをと重く其に撰し其に撰し其に撰し其に撰  
ハ湖龍高なり又春常春瀾なりと撰し其に撰  
と撰し其に撰し其に撰し其に撰し其に撰  
竹杖若輕と撰し其に撰し其に撰し其に撰  
代記に撰し其に撰し其に撰し其に撰し其に撰  
人撰し其に撰し其に撰し其に撰し其に撰  
撰の撰し其に撰し其に撰し其に撰し其に撰  
なると撰し其に撰し其に撰し其に撰し其に撰  
道古年記其に撰し其に撰し其に撰し其に撰  
寛政の中撰し其に撰し其に撰し其に撰し其に撰



まゝにきれども妙にまゝにきゝかの格うゝ金の  
なりき廻文の外類せし名を〜袋入の本世の頃  
とて止む是を〜後の袋入を其の年の書本と先  
つ袋入の〜て出〜一月福〜して直し書本〜  
〜て出〜と云〜なり〜曰五年唯つき曾我の  
名号工藤小野向と〜信ハ書せの〜花門小野腰  
〜〜き由成〜と〜のな〜と〜又下巻小清長  
の始家の厨房のさまと國と〜書ま〜けの後  
年國烟員なりとゆ〜國と巧〜と〜清長院  
小先教と重〜と〜曰六年天道大板橋小造物

者と〜して天道様と名つけ其形と日輪の澤衣  
〜たる姿小重き出〜と〜後の釋史皆とよ小  
〜子深州も是と〜と〜と〜釋史教判  
と考〜と〜と〜と〜年成紙小草紙紙紙  
裡在〜と〜と〜と〜曰七年家の化  
物小表と二り有條あり重政り筆直小通〜とい  
ふ〜釋史中作者の小傳小概と〜と〜の春町  
其返報化物法小紙も甚全交り智恵秘万家亭り  
新傳の始末傳り浮世の醒一九り新傳の種本其  
餘於あ〜と〜曰八年世の釋史ハ書中の逸史



他よりなりて五年よりなりて、このハ、採りて後て  
作らざるなりなりなりなり、曰二年此の頃より  
東傳の他大、行これ其名より、此に生誕とい  
ふもの流りて、こゝに採りて、或他より、北尾政  
演、此年より、喜本此画を、此より、曰四  
年、是金文より、長安法大より、此前杜芳此より、  
是とい、一、敵向のものあり、後、築地善好、作、田  
原相候、此候物と稱して、可なり、真、此、此  
か、この、神代卷、天神七代の事と記さ、その、  
て、此より、一九、候、て、地神五代、此と、此の、以、

〜、此物、此の本行、此、此、此、此、  
〜、此年の、出板、此、此、此、此、此、  
の、凡俗、此、此、此、此、此、  
〜、此、此、此、此、此、  
曰、五年、此、此、此、此、此、  
著、此、此、此、此、此、  
真、此、此、此、此、此、  
此、此、此、此、此、  
此、此、此、此、此、  
曰、六年、此、此、此、此、此、  
ハ、全文、此、此、此、此、此、





しとくひけの二前版付の六冊ありしか其録ふ  
る 曰二年より以後入の上本出る是より後の袋  
入の書紙も指すたるものありしはこの上本も  
粘入の指すて紙形もちやして表紙ありし製本  
美ししと王侯も呈しつし思ふの玩弄もくも  
のよありけの上本の後ハ禁入ししとて書  
本もちして書を出ししとて後年合巻の出るる  
後ハ最初の上本支ししと合巻もししと書本も  
ありしとて出ししと 文化元年版付の本のよ  
く 行もは書付る終り年より始て版付の地あり

る今年の新刻版付との二よりして僅小紙作あり  
る 曰二年と三年の新様しよく 版付ありし我  
作の本ハ僅小十餘部も過りし 宣年よりハ我  
も版付ししと 曰二年と三年の刊板もして版付  
ししとまた其作者の名と紙も 紙作の紙の字と  
有して唯他とのし書も指し我作の紙の字と宝  
曆の文河も紙も 安永の春町森三二も付し四  
十餘年用の書も 紙の字との付しありしと 緒え  
たる世運もつありしと け年三島紙雷を即合巻  
の紙もつありしと け年四の世上の神史も

一丁全卷之少也

又曰書載中丁所之他者之石、桂子春所昂我南  
北在二二錦蘇去浴龜遊於連吳塔左政侯友華令  
中裔新葉可立白馬通英文溪堂可吳春旭常翠杜  
風車全交隔下逸人本之即新遊軒蓋十南池仙紫  
南是和高蓬萊山人為經了象亭京傳社芳宇之在  
真佛風物古風四方山人龍真里舟楚滿人奈為野  
馬廬人東雲高幾法弟內二牛坊務志瘞瘞東之私  
玉駕去於飛田碧古古何之陳里山李香紀建丸自  
惚山人宦春滿真秋香中差助二水山人露住薜蘿

飯橋甘交白雪紅羊片行町物蒙堂紀產名在千声  
雞去編坊万理甲卷万室万別虛空山人慈愍成笑  
信石山人二世在二二琴好陽春亭象睡顏軒東一  
橋山人材木丁之新好傳樂山人杜泉時鳥籠東子  
勝園有面久良記大衆山人秋收冬藏土生陳交氣  
象天業黑木見得坊麻杖山人桃象山人烟羊助草  
柑可候括成虛呂利馬琴无名子坪平梁地善坊之  
馬森羅亭善好一九笑丸黃毫秋舖馬笑室倉主鴨  
洞景則舊套九九年坊偶偶子巴麻室宋色亭莊英  
香保留清遊軒和程南龍永壽堂美明色主可將之

笑玉亭見越鬼武田樂一磨三光穿山甲色三額飾  
竹三莊長素秋八重或景女有解斗馬先仙侍石  
高山灰女一生糸這高萩广幸信亭山旭亭蘭衣櫻  
朝助員壽亭

又重工の名ハ清徑清満吟雪香町友幸香常政演  
谷久和御龍高清長苗徳高と次郎春旭歌磨重政  
政美春朝國信春英春潮三蝶春道常九旭光道磨  
子代女膳花柳郊常之女上亭行磨中園毛光文橋  
春磨二也春町長在北前調旧春春亭景昌和道子興  
豊丸春喬亭磨北岳末城山人百亭在久磨

按ニ佐子紙のこゝと記と一書ハ程多ク就作者  
小傳たしハ就他六家撰の教なりこと等ハ  
人の知る所也ハ引くそ在ニ寛永以降の佐双  
紙敷種と載セ神沼輩の大畧と云ふ



讀本経

浮也経類考葛師北斎の案小備像讀本多く画し  
て也小考より凡傳入讀本けのくもこひつた  
る浮小けの以画入讀本也小流りそ重法草双紙  
小似よりぬを以て黄々々々讀本より別派と  
そけの時代北斎漢州時小信ととあり是如年表  
寛政年間傳小山東京傳曲亭馬琴、讀本草双  
紙行のして年々數篇と様行し又京方扱くも経  
入讀本封紙ありと様行しと江戸へ下とと他者  
部類讀本他者於小赤本洒落本讀本の如き各其

其めると云歟蓋ハこと一カを祖其文小雅俗を  
他者有之と本日〜〜は是故小其部と分ちて  
詳小とさ〜と得と云と今〜百年あるも己茶  
也俗カ〜冊子物語の物語本とリハ〜こハ  
物語の本とリ〜へ〜と語路の簡便ふまうせ  
中畧〜た〜と又と来ハ讀由〜書  
〜〜讀〜ハ〜と稱呼理あり〜似  
た〜も〜亦故なふ〜寛文〜以降  
享保の頃〜の臺の叙い〜物〜佐々  
〜〜更今の錦佐の如〜  
善川師主奥村政信ハ  
〜折本〜本今

此れも上〜と赤本と唱〜ハ重と宗〜  
〜其佐と果能〜〜又其の類〜文  
と音〜一巻〜魚一二張ある冊子ハ必  
讀〜そのなれハ重由小辭〜本〜い  
〜〜た〜云〜

按小讀由佐ハ〜著者の意を解〜重〜小非  
さ〜ハ海と〜故小其部〜葛飾北高書了琴  
〜佐文〜即讀由挿画の〜一場の儀傷  
〜と生〜ぬ〜か〜七全傳南村菱七冊ハ曲  
亭馬琴々文化五年の著作〜北高の挿画〜

此の釋史大いせしりしこまあつた北高の勢  
をよみし挿魚と重なりしよりさきとくつひ  
あつたは南村友の事候と勝手七り情死の教く  
所ふたは北高師振の命を何より傳と重なりて  
表の意物より馬琴又て向くけの如く蛇と係  
ふり為し情死の男女の情死の証候さしりし  
けり如く速し前陣さしりて板下とわしりけ  
し北高ち小憤り候り余り挿魚よりして著化  
の意と補ふをあらさしりて以来の候り為し筆を  
下しりしつひしとて其後和解して日九年南村

後記の挿魚より再び誤倫を生し交を修たりし  
し葛飾北高傳し一説は後記卷一六丁裏刀匠  
日掛、立廻りの所ふりて馬琴日掛を——て  
し草履と合し書と書しりさしりと重なりしと傳ふ  
北高若て甲しは活積物誰りしとてしりし  
若し馬しりしとてしりし若し先つしとてしりしと馬琴  
大い書しりしとてしりし交りしと傳ふし原因なりし

鳥羽佐

寛洞平衣物語

主永七年板

小通きくら

鳥羽佐と

川上との府服飾もや々出てぬると是といハ歌

形も是人間あはれけとのそ〜ハ似〜

五品筆鋒補送

吉平春ト著

小を頂〜鳥羽佐

と名つけ相画と書りあはれけを去〜の借正小

よ〜とのウ高狭會鳥ハ風流を〜た〜人物ハ

〜異形なり〜是の長短ハ服大口人赫と〜

風流と〜〜〜五月雨のつと〜秋の歌

の〜と〜〜〜物ハ〜〜〜と〜



松平島羽重の娘、評、なり、蓋、貞享元録のこ  
ろ、娘、なり、され、其の、けり、娘、一、行  
人、なり、と、お、は、れ、結、遊、若、寛、永、法、眼、春、ト、画、き、出  
た、た、た、た、い、い、い、い、春、ト、著、い、と、  
画、品、筆、鋒、補、送、の、島、羽、重、の、下、り、と、一、件、と  
る、て、お、は、れ、古、画、依、考、小、作、所、全、巻、と、い、ふ、と、  
か、き、娘、む、し、い、又、高、屋、月、彦、の、皇、村、山、人、全、眼、の  
筆、意、小、娘、も、い、ふ、と、い、ふ、と、評、な、り、此、の  
全、眼、の、逸、人、画、史、小、赤、福、高、平、安、の、人、名、の、全、眼、画  
法、光、琳、と、い、ふ、と、い、ふ、と、自、己、の、松、平、島、重、妙、なり、と、い

て、俗、稱、と、評、な、り、或、は、古、画、備、考、小、載、と、い、ふ、  
佐、郡、全、巻、の、事、なり、一、葉、茂、堂、雜、録、小、松、平、島、師、耳  
島、重、の、浪、花、の、巻、なり、京、町、塘、と、い、ふ、と、一、俗、稱  
松、平、島、重、と、い、ふ、と、其、娘、之、酒、造、家、なり、と、い、ふ、と、浪、骨  
董、鋪、と、い、ふ、と、松、平、島、重、と、い、ふ、と、世、に、名、高、り、福、中、俳、優  
角、橋、の、姿、と、い、ふ、と、小、あ、い、ぬ、さ、ふ、と、い、ふ、と、つ、と、い、ふ、と、其  
情、態、と、い、ふ、と、模、して、頗、る、雅、致、あり、又、滑、稽、の、才、あ  
り、て、戲、作、と、い、ふ、と、義、古、史、の、道、外、評、なり、小、達  
一、松、平、島、重、と、い、ふ、と、浪、華、一、崎、の、人、物、と、い、ふ、と、  
と、い、ふ、と、又、佐、郡、全、巻、の、趣、に、評、考、あり、と、い、ふ、と、余、を、以、耳



